サ変動詞を形成するV1+V2型複合名詞
－対応する複合動詞の有無に基づく違いを探る－

鈴木智美
東京外国語大学大学院国際日本学研究院
tmsuzuki@tufs.ac.jp

1.　はじめに：サ変動詞の形成

日本語学習者の辞書等の学習ツール使用について調査を行っている際、以下の例(1)のような事例に遭遇した。調査の課題は、短文の空欄箇所に適当な表現を入れるという形式のものであり、言葉を探すために、辞書等のツールは普段通りに使用可とした。

(1) 警察は、犯人がその男だと_____することができた（＝犯人が誰か、わかった)。

この例の下線部分には、「特定」「確信」などの漢語動名詞をあてはめることができる。イタリア語を母語とする調査参加者は、まず電子辞書の伊和辞典でイタリア語の“identificare”（英語の“identify”にあたる語）を調べ、「殺人犯を割り出した」という用例を見つけた。そして、電子辞書の国語辞典で、動詞「割り出す」の意味を確認した。しかし、この「割り出す」という動詞を、例文の前後の文脈に合うように「＊割り出しする」というサ変動詞として用いてよいかがわからなかったということであった。

２．　サ変動詞化に関する辞書の記載情報

「スル」を付加し、サ変動詞を形成することが可能かどうかという情報は、辞書からどのように確認することができるだろうか。

一般に、漢語動名詞（「勉強」「結婚」など）については、ほとんどの辞書に、「名詞」および「サ変動詞」という２つの品詞情報が併記されている[1)]。見出し項目として挙げられた名詞の下に「スル」と記すことで、サ変動詞化が可能であることを示している辞書もある（『大辞林 第三版』)。一方、上記の「割り出し」のような複合名詞については、サ変動詞化が可能かどうかについて、情報の記載のない辞書もある（『岩波国語辞典 第七版新版』)。

辞書において、サ変動詞を形成可能な名詞のすべてに、その情報が漏れなく記載されているのであれば、学習者はその情報に従えば、迷うことはない。しかし、その情報が記載されていない場合には、学習者は何らかのべつの基準に基づき、サ変動詞化が可能かどうかを判断しなければならない。学習者には、どのようなルールを示すべきだろうか。

ここでは、「勉強」「結婚」などの漢語動名詞はひとまず置いておき、(1)で問題となった「割り出し」のような複合名詞について考えることとする。

３．　V1＋V2 型複合名詞のサ変動詞化

3.1　対応する動詞形のある V1＋V2 型複合名詞の場合

例(1)で、学習者が辞書で見つけた動詞「割り出す」は、「V1＋V2」（動詞「割る」＋動詞「出す」）型の複合動詞である。「割り出し」は、この動詞の連用形からの転成名詞である。このような複合名詞（「割り出し」）には、これに対応する複合動詞（「割り出す」）が存在するのであるから、あえてこれに「スル」を付けて、「＊割り出しする」というサ変動詞を形成するということは、一般的にはないのではないかと考えられる。

しかし、これには例外も存在するようである。例えば、「盗み見」「使い立て」などの V1＋V2 型複合名詞には、それぞれ「盗み見る」「使い立てる」のように、対応する複合動詞形が存在する。しかし、これらの複合名詞は、同時に「盗み見する」「使い立てする」のようにサ変動詞化も可能と思われる。

他にも、例えば「やり直し」「飾り付け」「言い逃れ」などの V1＋V2 型複合名詞も、「やり直す」「飾り付ける」「言い逃れる」という対応する複合動詞形が存在する。口語的に助詞「を」が脱落したものかとも考えられるが、これらの複合名詞についても、サ変動詞化は許容されるのではないだろうかと考えられる。

上記例に挙げた 5 つの複合名詞について、各辞書を見てみると、サ変動詞化についての情報は以下のようになっている。(「情報なし」は、サ変動詞化についての情報がない意。)

表１　対応する動詞形のある V1＋V2 型複合名詞のサ変動詞化についての辞書の記述

	盗み見	使い立て	やり直し	飾り付け	言い逃れ
『広辞苑』第六版	情報なし	情報なし	情報なし	情報なし	情報なし
『岩波国語辞典』第七版 新版	情報なし	情報なし	－(項目なし)	－(項目なし)	－(項目なし)
『大辞林』第三版	(名) スル	(名) スル	(名) スル	情報なし*	情報なし
『明鏡国語辞典』第二版	名・他サ変	名・他サ変	情報なし**	情報なし**	情報なし**
『新明解国語辞典』第七版	-する (他サ)	-する (他サ)	情報なし**	情報なし**	情報なし**

(*は、名詞「飾り」の項目の中に、子見出しとして「飾り付け」の記載がある。)
(**は、対応する動詞項目の中に、参考情報として名詞形が記されている。)

『広辞苑 第六版』は、「結婚」「勉強」のような漢語動名詞も含め、サ変動詞化の情報は特に記していない。『岩波国語辞典 第七版新版』は、漢語動名詞には「名・ス自」(「結婚」)、「名・ス他自」(「勉強」) のように記載があるが、ここで見たような複合名詞については、

サ変動詞化の情報は記載がない。その他の辞書では、漢語動名詞と同様にサ変動詞化について情報の記載はあるが、可否の一致しない点（「やり直し」）が見られる[2)]。

3.2　対応する動詞形のない V1＋V2 型複合名詞

一方、V1＋V2 型複合名詞には、鈴木（2014）で確認されているように、対応する動詞形のない複合名詞（例えば「立ち読み」に対応する「＊立ち読む」はない）が存在する。対応する動詞形がないならば、「スル」を付加し、「立ち読みする」というサ変動詞を形成することも不自然ではないのではないかと考えられる。

実際に、対応する動詞形のない V1＋V2 型複合名詞には、「行き来する」「食い逃げする」「つまみ食いする」「上り下りする」など、サ変動詞として使用可能な例が観察される。このような対応する動詞形のない V1＋V2 型複合名詞については、基本的にサ変動詞化が可能であると一般化することが可能だろうか。

４．　辞書の記述：対応する動詞形のない V1＋V2 型複合名詞のサ変動詞化

鈴木（2014）では、現代日本語において対応する動詞形を持たない V1＋V2 型複合名詞を、辞書（『大辞林 第三版』）に基づき抽出し、それらを「現代語として一般的に用いられるもの」（166 語）、「使用分野が特定されると思われるもの」（250 語）、「日常的に用いられにくいもの」（85 語）に分類している。また、対応する動詞形を持つとされるものの中にも、現代語としてその動詞形が一般的に用いられにくいと考えられるもの（「居眠り」「飢え死に」「駆け落ち」「走り書き」「着太り」など 20 語）もあるとしている。

さらに、対応する動詞形を持つが、それが現代語としては一般的に用いられにくいと考えられる上記 20 語は、辞書の記述に基づき確認すれば、そのうち 4 語（「行き止まり」「押し引き」「伸び盛り」「病み上がり」）を除き、いずれも「スル」を伴いサ変動詞を構成することが可能であるとしている。そのようなサ変動詞（「居眠りする」「走り書きする」「着太りする」など）と、対応する複合動詞（「居眠る」「走り書く」「着太る」など）の使用状況を、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」などに基づき探った結果、サ変動詞のほうが自然に用いられるのではないかと考えられることが指摘されている。

では、対応する動詞形のない V1＋V2 型複合名詞のうち、鈴木（2014）で、現代語として一般的であるとされている語（166 語）についてはどうだろうか。鈴木（2014）で付け加えたとされる「試し書き」「飛ばし読み」の 2 語を除く 164 語につき、辞書（『大辞林』第三版）に基づき確認すると、このうち、計 73 語についてはサ変動詞化が可能であることが確認できる。「当て逃げ」「思い出し笑い」「駆け引き」「立ち食い」「作り笑い」「殴り書き」「盗み読み」「乗り逃げ」「回し飲み」「寄せ書き」などである。

残り 91 語は、同辞書ではサ変動詞化が可能とはされていない。その中には、名詞と形容動詞の性質をあわせ持つとされるもの（「出し抜け」「負け嫌い」「破れかぶれ」など）、V1+V2 型複合名詞であるものの、後項名詞に動詞性の感じられにくいもの（「暮らし向き」「読み応え」「歌い回し」など）、さらに、「言いなり」「浮き彫り」など、「～になる」と表現するのが自然なものが含まれている。ただし、「盗み読み」はサ変動詞化が可能であるとされているが、「盗み食い」「盗み撮り」は可能であるとはされておらず、「開け閉て」は可能であるが、「開け閉め」は可能であるとはされていない。サ変動詞化の可否については、コーパスなどを用いてより精査が必要ではないかと思われる。

５．　まとめと今後の課題

ここでは、V1＋V2 型複合名詞について、まず上記のように対応する動詞形のないものについて、そのサ変動詞化が可能かどうかを辞書に基づき確認してみた。結果、必ずしもそのすべてがサ変動詞化が可能であるとは言えず、さらに精査が必要であることがわかった。

対応する動詞形のある V1＋V2 型複合名詞については、鈴木（2014）で、現代語としてその動詞形が一般的に用いられにくいものについては、サ変動詞の方がむしろ自然に用いられているのではないと指摘されている。対応する動詞形が一般的に用いられるものの場合には、表１に示した通り、辞書の記載情報において、サ変動詞化の可否が分かれる点が見られた。対応する動詞形のある V1＋V2 型複合名詞の中には、「スル」の付加を許容し、サ変動詞を形成できるものは全体でどのぐらい存在するのだろうか[3)]。

以上のような点について、今後詳細に明らかにしていくことを課題としたい。

注

1)『広辞苑 第六版』には、この点についての情報は特に記載はない。ただし、見出し項目「勉強」の中に「勉強する」を用いた用例が見られる。

2)「スル」の付加が可能かどうかは、使用頻度などの観点から精査が必要だと思われる。

3) 例えば「複合動詞レキシコン」（国立国語研究所）などを参考に、V1＋V2 型複合動詞の中から、その連用形転成名詞が可能なものを抽出し、「スル」の付加について個々に検証するなどの方法が考えられる。

参考文献

北原保雄（編）（2010）『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
新村 出（編）（2008）『広辞苑 第六版』岩波書店
鈴木智美（2014）「現代日本語における対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞-辞書に基づくリスト化-」『日本語・日本学研究』第４号　東京外国気大学国際日本研究センター　pp.95-109
西尾 実・岩淵悦太郎・水谷静夫（編）（2011）『岩波国語辞典 第七版新版』岩波書店
松村 明（編）（2006）『大辞林 第三版』三省堂
山田忠雄・柴田 武他（編）（2012）『新明解国語辞典 第七版』三省堂
「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」国立国語研究所 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
「複合動詞レキシコン」国立国語研究所　http://vvlexicon.ninjal.ac.jp